

## 5 クラウドネイティブソリューション “C-Native (シーネイティブ)”

# コンテナ型仮想化を中心とするクラウドネイティブ技術を活用し、お客さまのDX推進をサポート

伊藤忠テクノソリューションズ株式会社（以下、CTC）が2020年10月より提供している“C-Native”は、コンテナ型仮想化技術の有効活用を支援するサービスだ。このサービスには、システム運用の効率化や迅速なITサービス提供を可能にすることで、デジタルトランスフォーメーション（以下、DX）やイノベーションにつなげるという狙いがある。

### SIerからDX支援、クラウドインテグレーターへシフト

CTCにはSIerとして長年に渡り蓄積してきた知見やパートナーシップ、お客さまとの関係といった強みがある。同社はこの強みを活かし、主力事業をSIから、お客さまのDXやイノベーション支援へとシフトしようとしている。

「DXやイノベーションに取り組む企業にとって、共通する課題の1つが『新しいIT技術活用へのシフト』です。なかでも我々はクラウド技術を前提とする『クラウドネイティブ』を重視しています。拡張性が高く管理しやすい、また観測可能

で疎結合なシステムを実現可能にする、自動化を組み合わせ効率化する、といったことを想定しています。C-Native（図1）はこのようなクラウドネイティブな製品や技術に特化したIT環境を実現するサービスのブランドです。」（安部氏）

### コンテナ型仮想化技術を活用

C-Nativeの中核となる技術がコンテナ型仮想化技術だ。OSごと仮想化するサーバー仮想化と異なり、アプリケーションの実行に必要なリソースを仮想化するため、サーバー仮想化よりも必要なリソースが少ない。また開発・テスト環境のコンテ



伊藤忠テクノソリューションズ株式会社  
F S技術開発第3部 技術開発第1課  
エキスパートエンジニア 安部 正弘氏

ナイメージをそのまま本番環境に展開して動作できるというメリットがある。OSに依存せず、パブリッククラウドであってもオンプレミス環境であってもコンテナイメージを容易に移植可能だ。

コンテナ型仮想化ソフトとしては Docker、コンテナ化したアプリケーションのデプロイやスケールリング、監視など、ITサービスを維持する上で必要な機能を提供するオーケストレーションシステムとしては Kubernetes（クバネティス）といったオープンソースソフトウェア（OSS）が広く知られている。

#### 効率化にもとづいたサービス提供

自動化、自律化など、回復力の高い技術・方法論を活用を通じて、競争力を高めることで、お客様に提供するサービスの効率と品質の向上を目指す



#### ベストプラクティスの提供

CTC Lab等での検証・導入実績に基づいたベストプラクティスマテリアルの活用等を駆使する事で、お客様への迅速なサービスの提供を目指す

クラウドネイティブ技術・製品にフォーカス。お客様がDXサービスの創出を促進する為に重要な、クラウドネイティブ技術・製品にフォーカスしたソリューション・サービスを通じて価値提供を行っていく

図1 C-Nativeが目指す世界観・強み

## OpenShift を活用し Kubernetes の導入・運用負担を軽減

Kubernetes は導入・運用・管理に高度なスキルを要することが、活用を検討する多くの企業に共通する課題だ。C-Native は Red Hat 社のプラットフォーム製品“Red Hat OpenShift Container Platform (以下、OpenShift)”を活用することにより、この課題を解決する。

OpenShift は Kubernetes を“Red Hat Enterprise Linux CoreOS”と統合し、エンタープライズ向けに適した高い堅牢性と安定性を実現した製品だ。運用や開発の利便性を高めるさまざまなサービスも付加されている。

## C-Native の主な特徴

C-Native の各種サービスにより、OpenShift を活用して CTC の“TechnoCUVIC”をはじめとするパブリッククラウドやプライベートクラウド上に IT 環境を構築・運用できる。サービスメニューは図 2 に示すように、「アプリケーション」、「インプリメント」、「マネージド」という 3 つのカテゴリーに分かれている。

たとえば既存アプリケーションをコンテナ向けにモダナイズするためのアセスメント、CI/CD(継続的インテグレーション/継続的デリバリー)を実現するためのテンプレート構成・製品の提供、SI、OpenShift の維持に必要な運用・保守、といったサービスが用意されている。

また年間契約のライセンスが必要な OpenShift を、従量課金で利用可能なサブスクリプションサービスも用意されている。このため PoC 的

『C-Native』は、お客様のDXを促進する『クラウドネイティブ製品・技術』に特化したサービスです。

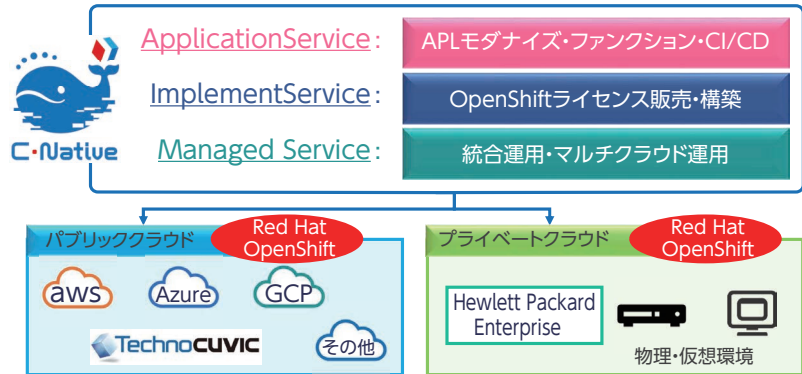


図 2 C-Native の全体像

な短期間の利用もしやすい。

## OpenShift を含むコンテナ型仮想化技術全般の豊富な知見が強みに

CTC は 2017 年頃より OpenShift を活用したクラウドネイティブな IT 環境構築に注力してきた。近年発表された事例としては、大手の共済事業者や信販会社向けの Web システム基盤構築を挙げることができる。これらの事例ではアプリケーションのデリバリー期間短縮、ニーズに応じた柔軟なリソース増減、障害検知・復旧の自動化による信頼性向上など、さまざまな価値の提供に成功している。お客さまからは「CI/CD ツールがなくてもアプリケーションのリリースが簡単になった」といった声も寄せられているという。

また Red Hat 社のパートナー向けプログラム“Red Hat OpenShift Managed Practice Program”に参加しており、OpenShift に関するベストプラクティスや最新情報を継続的に C-Native に取り込んでいる。

「CTC には Kubernetes や OpenShift の活用だけでなく、コンテナ型仮想化全般についての豊富な

知見とノウハウがあります。このことが C-Native の強みの 1 つと考えています。」(安部氏)

## 単純なコンテナ化ではない、真の導入効果を得るための支援に注力

既存システムをコンテナ型仮想化環境に載せかえるだけでもある程度のメリットを享受できるが、C-Native ではそれ以上の価値提供を実現していくとして、安部氏は次のように述べている。

「OpenShift を導入すればサービス提供が早くなるとイメージをお持ちのお客さまが多いと感じます。ですが OpenShift はツールの 1 つです。実際には体制の整備など、他にもやるべきことがあります。我々が重視しているのは、より良いアプリケーションをタイムリーに提供しサービスを改善するためのサイクルを早く回せるようにすることです。DevOps 的な開発・運用体制を構築するということでもあり、開発チームとインフラチームの分断をなくするような効果も期待できます。我々がそのための課題抽出/解決の支援にしっかり取り組むことも、C-Native の重要な特徴の 1 つです。」